

市民俳歌柳壇



ミヤリーマークは
ジュニアの句・首です。

俳壇 星田一草選

◎選評 かつては棉畑や綿摘みの姿は普通に見られた。作者はあの昔を思い出したのである。綿摘み、綿繰機の作業などなど。一握りの綿に多くの思い出が込められているように思われる。「綿摘む」は秋、「綿」は冬の季語。

街路灯見上げて黒い雪が降る
弥生一丁目 大河原 信昭

食積や上座の母に安堵する
岩曾町 半澤 美恵子

雪とけて森いっぱいの子どもたち
陽南小学校 戸田 葵唯

柳壇 荒井宗明選

◎選評 頼みごとというのは、心のどこかに負い目があるようである。屋根が見え、塀が近くなると、動悸が激しくなる。玄関の前で、大きく深呼吸をする。話はいよいよ本番である。

親指と小指でしゃべる裏話
下田原町 五十嵐 由美子

針の穴眼鏡も意地となつてくる
緑3丁目 宇賀神 規子

つまみ食い猫にも分ける冷蔵庫
鶴田町 御牧 秀世

玄関で派手に待ってるスニーカー
清原台4丁目 水上 義明

歌壇 安野登美子選

◎選評 正月三が日を送り4日は俗に言う仕事始めである。「洗濯に来復始む」普段の生活に戻ったのである。「一陽温し」この陽は、元の生活に戻った、柔らかな、おだやかな安堵の日差しと思う。「一陽来復」の四字熟語の言葉を切り取った意欲を称えたい。冬が去り暖かな春が来ることをイメージさせる1月4日である。

寒菊や依りかかり咲きえんじ色
木枯れし庭をひとり占めして
若松原3丁目 齊藤 晃子

寒波きて小雨にけむる冬木立
墨絵の如く空に写せり
長岡町 赤羽 スミ

玄関に息整える頼みごと
不動前2丁目 山中 ヒロ子

来復始む一陽温し
野沢町 鈴木 孝男

子供らの声とんと聞こえず
泉町 秋野 毅

花楚々として庭を彩る
戸祭2丁目 須藤 テル子

蠟梅を好みて植ゑし夫は亡く
寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

寒菊や依りかかり咲きえんじ色

木枯れし庭をひとり占めして

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

玄関に息整える頼みごと

来復始む一陽温し

子供らの声とんと聞こえず

花楚々として庭を彩る

蠟梅を好みて植ゑし夫は亡く

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

寒菊や依りかかり咲きえんじ色

木枯れし庭をひとり占めして

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

玄関に息整える頼みごと

来復始む一陽温し

子供らの声とんと聞こえず

花楚々として庭を彩る

蠟梅を好みて植ゑし夫は亡く

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

寒菊や依りかかり咲きえんじ色

木枯れし庭をひとり占めして

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

玄関に息整える頼みごと

来復始む一陽温し

子供らの声とんと聞こえず

花楚々として庭を彩る

蠟梅を好みて植ゑし夫は亡く

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

寒菊や依りかかり咲きえんじ色

木枯れし庭をひとり占めして

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

玄関に息整える頼みごと

来復始む一陽温し

子供らの声とんと聞こえず

花楚々として庭を彩る

蠟梅を好みて植ゑし夫は亡く

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

寒菊や依りかかり咲きえんじ色

木枯れし庭をひとり占めして

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

玄関に息整える頼みごと

来復始む一陽温し

子供らの声とんと聞こえず

花楚々として庭を彩る

蠟梅を好みて植ゑし夫は亡く

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

寒菊や依りかかり咲きえんじ色

木枯れし庭をひとり占めして

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

玄関に息整える頼みごと

来復始む一陽温し

子供らの声とんと聞こえず

花楚々として庭を彩る

蠟梅を好みて植ゑし夫は亡く

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

寒菊や依りかかり咲きえんじ色

木枯れし庭をひとり占めして

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

玄関に息整える頼みごと

来復始む一陽温し

子供らの声とんと聞こえず

花楚々として庭を彩る

蠟梅を好みて植ゑし夫は亡く

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

寒菊や依りかかり咲きえんじ色

木枯れし庭をひとり占めして

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

玄関に息整える頼みごと

来復始む一陽温し

子供らの声とんと聞こえず

花楚々として庭を彩る

蠟梅を好みて植ゑし夫は亡く

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

寒菊や依りかかり咲きえんじ色

木枯れし庭をひとり占めして

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

玄関に息整える頼みごと

来復始む一陽温し

子供らの声とんと聞こえず

花楚々として庭を彩る

蠟梅を好みて植ゑし夫は亡く

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

寒菊や依りかかり咲きえんじ色

木枯れし庭をひとり占めして

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

玄関に息整える頼みごと

来復始む一陽温し

子供らの声とんと聞こえず

花楚々として庭を彩る

蠟梅を好みて植ゑし夫は亡く

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

寒菊や依りかかり咲きえんじ色

木枯れし庭をひとり占めして

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

玄関に息整える頼みごと

来復始む一陽温し

子供らの声とんと聞こえず

花楚々として庭を彩る

蠟梅を好みて植ゑし夫は亡く

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

寒菊や依りかかり咲きえんじ色

木枯れし庭をひとり占めして

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

玄関に息整える頼みごと

来復始む一陽温し

子供らの声とんと聞こえず

花楚々として庭を彩る

蠟梅を好みて植ゑし夫は亡く

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

寒菊や依りかかり咲きえんじ色

木枯れし庭をひとり占めして

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

玄関に息整える頼みごと

来復始む一陽温し

子供らの声とんと聞こえず

花楚々として庭を彩る

蠟梅を好みて植ゑし夫は亡く

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

寒菊や依りかかり咲きえんじ色

木枯れし庭をひとり占めして

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

玄関に息整える頼みごと

来復始む一陽温し

子供らの声とんと聞こえず

花楚々として庭を彩る

蠟梅を好みて植ゑし夫は亡く

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

寒菊や依りかかり咲きえんじ色

木枯れし庭をひとり占めして

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

玄関に息整える頼みごと

来復始む一陽温し

子供らの声とんと聞こえず

花楚々として庭を彩る

蠟梅を好みて植ゑし夫は亡く

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

寒菊や依りかかり咲きえんじ色

木枯れし庭をひとり占めして

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

玄関に息整える頼みごと

来復始む一陽温し

子供らの声とんと聞こえず

花楚々として庭を彩る

蠟梅を好みて植ゑし夫は亡く

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

寒菊や依りかかり咲きえんじ色

木枯れし庭をひとり占めして

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

玄関に息整える頼みごと

来復始む一陽温し

子供らの声とんと聞こえず

花楚々として庭を彩る

蠟梅を好みて植ゑし夫は亡く

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

寒菊や依りかかり咲きえんじ色

木枯れし庭をひとり占めして

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

玄関に息整える頼みごと

来復始む一陽温し

子供らの声とんと聞こえず

花楚々として庭を彩る

蠟梅を好みて植ゑし夫は亡く

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

寒菊や依りかかり咲きえんじ色

木枯れし庭をひとり占めして

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

玄関に息整える頼みごと

来復始む一陽温し

子供らの声とんと聞こえず

花楚々として庭を彩る

蠟梅を好みて植ゑし夫は亡く

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

寒菊や依りかかり咲きえんじ色

木枯れし庭をひとり占めして

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

玄関に息整える頼みごと

来復始む一陽温し

子供らの声とんと聞こえず

花楚々として庭を彩る

蠟梅を好みて植ゑし夫は亡く

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

寒菊や依りかかり咲きえんじ色

木枯れし庭をひとり占めして

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり

玄関に息整える頼みごと

来復始む一陽温し

子供らの声とんと聞こえず

花楚々として庭を彩る

蠟梅を好みて植ゑし夫は亡く

寒波きて小雨にけむる冬木立

墨絵の如く空に写せり